
烏

水瀬律那

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

烏

【Nコード】

N5099B

【作者名】

水瀬律那

【あらすじ】

それは、カラスと少女の、黒の愛。そして、残酷なほどの暗黒の物語。

そこは、戦場。

無残に朽ち果てた人間が、

地面を埋め尽くすように、転がっている。

皆、動かない。

皆、死んでいる。

動くものは、いない。

ただ一匹を除いて。

それは、真っ黒だった。

真っ赤な戦場に映える、黒だった。

赤の中に、佇む黒。

それは、人の形をしていた。

死に至り、横たわる人間達を

何の感情も籠っていない目で、見渡す。

「・・・他愛もない・・・」

それは、小さく呟いた。

そして、その体は

突如砂になった。

砂は崩れ落ち、風に吹かれる。

そして、砂の中から出てきたもの。

それは、一羽の烏カラスだった。

カラスは、その黒い翼を羽ばたかせ

空に舞い上がり、どこかへと消えた。

その部屋は、暗かった。

光は、一つの窓から差し込む

日光だけだった。

その部屋の片隅で

少女は、椅子に座っていた。

肘掛に両方の肘を置き、

それはそれは、退屈そうに

椅子に座っていた。

少女は、ふと窓辺に目をやる。

そして、顔を輝かせ微笑む。

「あら。カラス。帰っていたのね」

窓辺には、一羽のカラスが止まっていた。

カラスは、少女に声をかけられると

少女の元へと、飛び近寄る。

少女は、肘掛に置いていた

片方の腕を、少し上に上げる。

カラスは、その腕に

静かに飛び降りた。

少女は、自分の腕に飛び降りた

カラスを、うつとりと見詰める。

「戦場はどうだった？」

カラスはそう、問われると

少女の腕から飛び降り、床に着地した。

そして、砂になる。

砂の中から、人間の形をした

真っ黒なものが、現れた。

「非常に、楽しませてもらいました」

人の形をしたカラスは、片方の手を

胸に当てて、軽く御辞儀をした。

「人間達が、無残にも滅んでいく姿。

その流れ出る血は滞ることを知らず、地を朱に染めていく

その姿は、非常に美しかったですよ」

カラスは、その鋭い目を細めて、微笑む。

少女はそれを聞き、身震いした。

「それはとても美しかったでしょうね……。ああ……。私も見たかったわ……。」

その美しさに身悶え、少女は感激する。

「カラス。今度は一緒に行きましょうね」

少女は椅子に座ったまま

カラスの首に手を回し、

カラスを抱き寄せる。

カラスは少しかがみ、

少女の背中に、手を回した。

「お望みのままに」

そして、暗黒のキスをした。

「剎那樣。仕事の依頼が舞い込んで参りました」

カラスが、少女——剎那に近寄る。

その日は曇り空で、今にも雨が降り出しそうな陰気な天気だった。

剎那はいつものように、椅子に座っていた。

カラスの言葉を聞くと、目を輝かせ笑顔になった。

それは、剎那が退屈していて

何か面白そうな事を聞いたとき、見たときの反応だった。

「あら、どんな仕事？」

剎那は、胸を弾ませながら聞く。

カラスは口の端を上げて、ニイと笑った。

「剎那様の好きな、戦争でございます」

それを聞いたとたん、剎那は

さも嬉しそうに、笑顔を見せた。

「まあ、戦争なんて何年ぶりかしら！」

剎那は喜びの表情を見せる。

「ねえ、カラス。早速行きましょうよ。もう戦争は始まっているんでしょう？」

剎那は身を乗り出し、カラスの腕を引っ張った。

「お望みのままに」

カラスは微笑む。

「じゃあ、行きましょう」

剎那は胸の高鳴りを押さえながら、立ち上がり、コートを着込んだ。

「剎那樣。・・・もう、体のほうは・・・」

カラスは、静かな声で問う。

「大丈夫よ。少なくとも、戦争が出来る体までには、回復したわ」

剎那は口の端を上げて笑い、さあ行きましょう、と言ってカラスに近づいた。

カラスは、刹那を抱き上げた。

刹那は、カラスの首に手を回す。

カラスは窓辺に近づき、

窓を開け放つ。

「wing^{ウィング}」

カラスが呟く。

すると、カラスの背中に

漆黒の翼が生えた。

「――刹那様。準備はよろしいでしょうか」

「ええ」

刹那は早く行きたい気持ちを抑え、

静かに返事をする。

「それでは」

カラスは窓淵に足を掛け、

そこから一気に、空へと踏み込んだ。

風が、顔の横を通り過ぎる。

寒すぎるほどの、冷たい風。

カラスはそれらを、翼で操り

目的地へと、一揆に急いだ。

「刹那様。着きましたよ」

カラスはそこに、ふわりと飛び降りて

刹那を、ゆっくりと地面へ降ろした。

「ああ・・・久しいわ・・・この匂い・・・」

刹那は胸を弾ませて、辺りを見回した。

地面は、倒れた人間で埋め尽くされていた。
そして、赤い。

ここは、戦場。

血の臭いが蔓延していて、なんとも無残な光景が広がっているこの場を、刹那は

目を輝かせ、見渡していた。

「お気に召されましたか？」

カラスは、微笑を浮かべ刹那に問う。

「ええ・・・！！こんなに楽しい気分になったのは、久しぶりだわ・・・！」

刹那はカラスを見ず、戦場を見渡しながら返事だけをする。

そこで、刹那はあることに気がついた。

「あら・・・？もう、戦争は終わったの？動いている人間は、誰もいないけれど・・・？」

刹那は不思議そうな、少し寂しそうな表情で言った。

「たぶん、向こうの方にいると思われます」

カラスが指差した方向を、刹那は見つめる。

しかし、刹那は視力があまり良い方ではないので向こう側は、ほとんど見えなかった。

「じゃあ、早く行きましょう。戦争が、終わらないうちに」
刹那は微笑みを顔に浮かべ、カラスに言う。

「お望みのままに」

カラスは返事をする、刹那を抱きかかえて翼を翻し、遠い向こう側へと飛んでいった。

「やはり、ここにいましたね」

カラスは、独り言のように呟く。

刹那が早く、と急かすが

カラスは、刹那をゆつくりと地面に降ろした。

「嗚呼！！なんて久しぶりのこの光景・・・！！」

刹那は感激に心を震わせ、それを見詰めた。

人間達が、命を惜しみもなく人を殺す、その姿を。

刹那達は、人々が戦う場から

少し離れた場所にいた。

「ねえ、カラス！私も戦ってきていいかしら？」

刹那は待ちきれない、という表情で

カラスを見詰める。

「お望みのままに」

カラスは微笑み、優しく答えた。

刹那の顔は輝き、そして

戦いの場へと、急いで行こうとした。

「刹那様。お待ちになってください」

カラスは静かな声で、刹那を引き止めた。

刹那は後ろを向き、何？と不機嫌そうに答える。

「私も、一緒に戦わせてはいただけないでしょうか」

カラスは片手を胸にあて、微笑する。

刹那は少しキョトンとして、それから不気味に笑った。

「勿論よ」

「・・・それでは、無茶を為さらないように。お気をつけて」

カラスは浅く、御辞儀をした。

刹那は不気味な微笑みを見せた。

「・・・何に気をつければいいのかしら？」

カラスはそれを聞き、少し考えるような素振りを見せ

ゆつくりと微笑んだ。

「・・・そういえば、刹那様には気をつけることなど有りませんでしたね」

刹那は笑い、そしてすぐさま戦いの場へと走っていった。

その走りは、誰にも見えないほどの速度だった。

カラスはもう一度微笑み、そして刹那同様
人間の目には、見えない速度で戦いの場へと向かった。

3（前書き）

少々戦いの場面がありますが、グロイ場面はないと思います。

刹那は、人間には出せない速さで走る。

コートの内側のポケットから

持ち運びできる、凶刃を二つ取り出すと

それを両手に持ち、そのまま

戦真つ最中の場へと、突っ込んでいった。

周りが、ざわめく。

驚きの声や、攻撃命令を下す声も聞こえた。

しかし、そんなものは刹那には関係ない。

刹那は、ただ人を殺すため。

そのために、凶刃を両手に持ち走っている。

刹那に攻撃しようと、一人が銃を撃ってきた。

それを右手の凶刃ではじき返し、

向かってくる相手に、左手の凶刃を突き刺した。

すぐさま右手を下ろし、横にいる相手を切り裂く。

切り裂いたと同時に、左手の凶刃を抜き

思い切り振り回して、後ろから向かってきた

相手の心臓に、突き刺した。

その間に右手の凶刃で、弾をはじき返す。

前から向かってきた相手を蹴り、

左手の凶刃を、相手から抜いて

左横から向かってくる、相手に突き刺す。

刹那はそれを、目にも止まらない速さで、

そして移動しながら、行っていた。

カラスは、人間には出せない速さで走る。

指先の爪を、鋭く伸ばす。

生えるように伸びるその爪は、まるで刃だった。

そのまま、刹那とは反対方向に走り
刹那と離れた場所に、移動する。

周りは騒いでいて、戦争どころじゃないらしい。
刹那を攻撃することに、必死だ。

そして、こちらに気がついた者も騒ぎ出し
向かってくる者もいる。

カラスはそれを見て、微笑む。

そして、両手を伸ばして

両脇の相手に、突き刺した。

両手をすぐさま抜き、右手を前に

左手を後ろに伸ばす。

両方の爪は、相手の肉を抉り

骨が見えるほど、威力が強かった。

右手を斜め上にやり、向かってくる弾を切る。

そのまま横に移動させ、異常な速さの弾丸を
突き刺し、真つ二つに割る。

それを行っている最中に、左手は

向かってくる相手を、次々となぎ倒す

作業を行っていた。

カラスのこの攻撃は、ほんの三秒間での
出来事だった。

三分後。

辺りは、先程とは打って変わって

倒れた人間達で、埋め尽くされていた。

カラスと刹那は、背中合わせで

息も乱さずに、立っていた。

まさに、刃を抑えて解く――

刹那とカラスには、敵はいなかった。

刹那は自分の手を、じっと見詰める。

「・・・なんだか物足りないわ。弱すぎるのよ。人間は拳をぎゅっと握り、その手を見詰める。」

「・・・やはり、魔物・・・ですか？」

カラスは刹那の横に移動し、

刹那を、一瞬見詰める。

「ええ・・・。・・・魔物と戦うのは、とても楽しいわ」

刹那は、無邪気に笑う。

それから少し考えて、そしてカラスに向かって微笑む。

「・・・でも、一番楽しいのは、あなたと話すことかしら」

カラスは、少し驚いた素振りを見せた。

それから、嬉しそうに笑った。

「・・・有難うございます」

カラスは手を胸に当て、浅く御辞儀をした。

「もう全員片付けたから、行きましょう」

「お望みのままに」

カラスは刹那を抱き上げ、翼を生やす。

漆黒の翼を翻して、空へと舞い上がる。

刹那は、カラスの顔に近づき

そのままキスをした。

カラスと少女の愛は黒。

血で染まるその地を後に、二人は飛び立ってゆく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5099b/>

烏

2010年10月12日02時15分発行